

〈編集後記〉本号の特集では、今年4月に設立された現代アフリカ地域研究センターにちなみ、東京外大のアフリカ研究・教育をとりあげました。アフリカの多様性と力強さに魅せられた教員・学生の熱度が、読者に伝わればうれしいです。多様性は大切。この当たり前のことを当たり前のものとして守り、次の世代に渡していくことも、東京外大の大切な役割だと再認識していただければ幸いです。（編集子）V

GLOBE Voice
グローブ・ヴォイス
2017 Number 12
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2017年10月発行
発行＝東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
総務企画課広報係

編集＝広報マネジメント室
編集協力＝日経BP社
印刷＝大日本印刷

アートディレクション＝犬飼健二
表紙撮影＝中川正子
デザイン＝糸川あゆみ（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2017
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
tufsjr2017102301

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

特集／アフリカの時代

2000の言語が存在し、
13億人※が生きるアフリカの地。
多様性と力強さにあふれるアフリカが、
今、大きな転換点に立っている。



The Power of Africa



African diversity
and strength
are immeasurable.



Show us the African
way of life.

GLOBE Voice
2017 Number 12

2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東京外国語大学の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。12号目となる今号は、2012年のアフリカ地域専攻に続き、現代アフリカ地域研究センターを開設した、東京外大のアフリカ研究・教育を特集します。

Contents

特集 アフリカの時代——3

学長対談——10
昭和女子大学理事長・総長
坂東眞理子氏

Alumni in the Spotlight——14
ブルータグ 事業開発ディレクター
兼 広報担当 相嘉優公子

FCケルン 育成部門
ゴールキーパーコーチ 田口哲雄

コラム「聴」——16
小田原 琳／品川大輔

Information——18

写真・本浪隆弘／モデル・国際社会学部 アフリカ地域 地域社会研究コース 4年 西浦梨佳子さん

※国連「世界人口予測2017年版」

The Power of Africa 1

汲めど尽きせぬアフリカの深淵

武内進一 教授
Shinichi Takeuchi
（現代アフリカ地域研究センター センター長）

「21世紀はアフリカの世紀」といわれるまでにアフリカへの注目が集まる中、東京外国語大学は2017年、現代アフリカ地域研究センターを設立した。もともと東京外大はアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）という国際的研究拠点を持ち、2012年には国際社会学部にアフリカ地域専攻を開設した経緯がある。今回のセンター設立は、そうした経緯をふまえ、さらに現代のアクチュアルな問題に対応していくための拠点形成を目指すものであると、センター長の武内進一教授は語る。

「目的の一つは国内外のアフリカ研究・教育のネットワーク構築です。国内のアフリカ研究者をつなぐハブの役割を果たし、海外の大学とのネットワークを構築していきたい。そしてもう一つが、アカデミズムを超えた実務家との連携です。外務省や各国大使館、JICAやJETRO、NGOなどとも協力し、開発や平和構築、環境保全といった現代アフリカの課題に貢献する研究・教育を行っていきたいと考えています」

武内教授はガーナ大学や南アフリカのプレトリア大学を訪れ、交換留学生制度の活性化に向けた取り組みを始めている。開発途上にあるアフリカの国々にとっては、留学費用の捻出が壁となりがちだが、すでに現地日本企業がガーナ人留学生の旅費の支援を申し出るなど、産業界からの支援も始まっている。

武内教授自身、30年以上にわたってルワンダ、コンゴなどアフリカ中部諸国の政治・経済、社会を研究してきた。実際に農村に居住して聞き取り調査を行うフィールドワークの経験も多い。「貧富の差が大きく、政情不安定な国が多いなどの課題は確かにあります。しかし、それ以上にアフリカの持つ潜在力、汲めど尽きせぬ奥深さのようなものに毎回魅了されます」と武内教授はアフリカの魅力を語る。

アフリカは訪れるたびに心地よい驚きを与えてくれると話す武内教授。「それまで持っていた常識が通じないので、自分自身や日本を相対化して、違った目で見ることができます」。「豊かさとは」「生きるとは」といった根源的な問いへのヒントをもらったことも何度もあるという。

現代アフリカ地域研究センターは、武内教授を含む4人の専任教員にAA研の教員も加わり、成果を教育にも還元する。「まだできたばかりで組織も小さいですが、一体となってアフリカを愛する人材を育てていきたい」と抱負を語った。▼

たけうち しんいち
1986年東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業、東京大学大学院総合文化研究科で博士号取得。JETROアジア経済研究所で30年にわたり中部アフリカの政治・経済、社会を研究。ルワンダやコンゴ共和国などで調査研究を行った。主著に『現代アフリカの紛争と国家―ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』（明石書店、2009年。第31回サントリー学芸賞、第13回国際開発研究大来賞受賞）。











アフリカは、ヨーロッパ、アメリカ大陸、
中国などがすっぽり入るほどの広大な地域。
実際のアフリカに触れると、その多様性と力強さに
圧倒される。2100年には世界人口の40%、
45億人がアフリカに占めると予想されている。
経済成長率の伸びも顕著で、
ここ5年間毎年5%台でGDPが増えている。

生のアフリカを体験し生きる力を高めてほしい

坂井真紀子 准教授
（大学院総合国際学研究院／国際社会学部アフリカ地域担当）

私は社会学の立場から、アフリカの人々の生活に視点を置き、さまざまな問題を考えるゼミを担当しています。近年はグローバル化により各地域で格差が拡大し、「先進国」「途上国」という従来のレッテルが通用しなくなっています。２０００年代に資源ブームを迎えたアフリカは経済成長を経験し、必ずしも援助に依存するだけの存在ではなくなりつつあります。一方、先進国はグローバル経済の中で疲弊し、アフリカに新たな市場を求めて進出しています。アフリカは激変する世界における一つの鍵であり、今後は経済的にも外交的にもアフリカとの絆が強まっていくでしょう。その意味でも、アフリカ地域研究の必要性は今後ますます高まっていくと思います。

アフリカを研究する意義は、それだけではありません。これまで人類は経済成長と効率性を追求してきましたが、ＩＴやＡＩの登場により居場所を失いつつあります。一方、アフリカでは人々がコミュニティーとして支え合いながら、独自の仕組みを作って柔軟に対応している。私たちが見習うべき面も多く、いろいろな意味で興味深いフィールドです。

東京外大では現代アフリカ地域研究センターを拠点に学外や海外の研究者との交流も活発化し、教育・研究環境も充実していくでしょう。アフリカの６つの大学との交換留学も始まりました。学生は現地で勉強し、生のアフリカを体験してほしい。柔軟性を持って人との違いを尊重し、生きる力を高めてほしいと思います。


タンザニアの町、ドドマの市場

東京外大の多言語環境は他大学にない大きな強み

大石高典 講師
（現代アフリカ地域研究センター／国際社会学部アフリカ地域担当）

カメルーンの熱帯林に住む狩猟採集民バカ・ピグミーと農耕民バクウェレの関係に注目し、15年にわたって人類学的研究をしてきました。その間に、アフリカでは市場経済化とグローバル化が同時多発的に進み、従来の〝分かち合う経済〟は大きな変化に直面。こうした変化に人々はどう対応しているのかを追いかけてきました。

現代アフリカには多元性が息づき、Facebookを駆使する人もいれば、熱帯林の奥地で象狩りをしている人もいます。欧米や日本の物差しでは測れない分、アフリカ的な視点を導入すれば、日本や世界の課題を違う角度で見たり、解決するための新たな糸口となる可能性もある。たとえば、アフリカでは多世帯が食事を共にする習慣がありますが、この〝共食の知恵〟は、貧困家庭や孤食の子どもに食事を提供する、日本の「子ども食堂」に通じるものがあります。

東京外大には、アフリカにおける文化人類学や言語学の蓄積があり、多言語環境を生かした独自のアフリカ研究を展開できます。今、アフリカとアジアのつながりが拡大しています。英語・仏語に加えてたとえば中国語やヒンディー語ができれば、世界的に見ても興味深い研究ができるかもしれない。これは、東京外大ならではの強みです。

アフリカの魅力の一つは「不完全であり続けることができる」ことではないかという議論がある。こうした見方は、日本社会の生きづらさを考える時、とても参考になります。等身大でアフリカと接続しながら、アフリカと関わり合う意味を考えていきたいと思います。


足の不自由な男性が、手こぎ車椅子をブリコラージュ





The Power of Africa 2

複雑なアフリカ地域の理解をうながす

世界に新しい価値観を送り込む
アフリカの学びは、国際社会の在り方を多面的な視点で捉える絶好の機会

人権や人道では解決できない難民問題の現実に向き合う

中山裕美 講師
（現代アフリカ地域研究センター）

紛争や圧政を逃れて国境を越え、テントのような小屋で、着の身着のまま水や食料にも困っている人たち――「難民」そんなイメージを持たれる人が多いかと思います。もちろんそういう人々もいるのですが、難民の実像はもっと多様で複雑です。

たとえば私が実地調査をしたザンビアの難民キャンプは40年もの歴史を持つところでした。もともとは隣国アンゴラの内戦を逃れた人々なのですが、すでに第二世代まで生まれ、ザンビアで教育を受け、生活の基盤もできており、内戦終了で帰ろうと思えば帰れるのに帰らない、という人も多くいました。

ＩＳの問題で注目を集めている、シリアの難民についても個々が抱えている事情はさまざまです。戦禍からの避難という側面の一方、より良い生活を求めてヨーロッパへ移動している面もあり、真意を見極めることは至難の業です。人権や人道的支援はもちろん大切です。しかしそれだけでは解決できない問題が、現実としてある。そこで、国と国、あるいは国際機関がどのように協調すれば問題を解決できるのか、複雑に絡み合った政治的なしがらみを解くにはどのような枠組みが有効か、などを国際関係論の立場から研究しています。

アフリカに興味を持ったのは小学生の頃にルワンダ大虐殺を知ってからなのですが、アフリカというのは実に〝くせになる〟場所です。行くたびに従来の価値観を根底から覆えされるのと同時に、自分がいかに西洋の考え方に染まっているかを気付かせてくれる場所でもあります。


自立支援で裁縫を習いミシンを扱う女性

アフリカ史から歴史と世界について考える

石川博樹 准教授
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

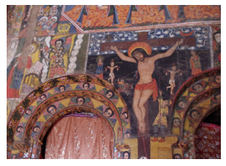
私が研究しているのは、アフリカの歴史です。特に、エチオピアの北部に13世紀に成立したソロモン朝エチオピア王国の歴史研究を専門としてきました。

アフリカでは、多くの社会が固有の文字を持たなかったために文字史料が豊富ではありません。その中で、エチオピアの北部では紀元前から文字が使用されてきたため、文字史料による歴史研究が可能です。

ここ数年は、アフリカ研究から歴史研究に一石を投じるため、アフリカの農業と食文化の歴史に関する共同研究を組織していました。

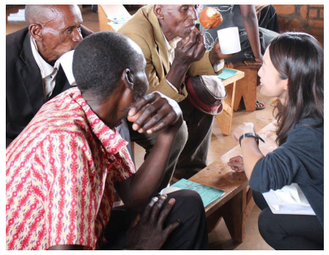
歴史学を含めた複数の学問分野の研究者と共同研究を進める中で、「たくさんとれて手間をかけずに食べられる作物がいい」というような効率に基づく選択と、「食べられるはずなのに食べない」「たくさんとれなくても調理に手間がかかっても好んで食べ続ける」といった必ずしも効率に基づかない文化的な選択が幾層も重なり合って、アフリカ各地の食文化が成り立っていることがわかってきました。歴史というものは、必然と偶然が織り成し、生み出されるものですが、この共同研究ではそのような歴史の不思議さを浮かび上がらせることができたのではないかと考えています。

日本人は、まず「日本の基準」を学び、次に「欧米の基準」を知り、それらを「世界的な基準」と考えがちです。しかし、アフリカについて、そしてその歴史について学ぶことによって、そのような考え方を超え、世界を見る力を鍛えることができるのではないかと私は考えています。


エチオピアの古都ゴンダールにある教会の壁画

ルワンダ留学での学びを糧に ドキュメンタリー番組を制作

加藤 麗さん
NHK 鹿児島放送局 放送部 ディレクター


虐殺の加害者側の人々を取材


留学時代の同級生と

昔から「変わっている」と言われることが多く、そんなことから、次第にマイノリティー差別や異文化対立などに関心を持つようになり、将来は国際機関で働きたいと考えるようになりました。ルワンダに留学したのは「紛争後のルワンダで唯一、平和学を学べる大学がある」と聞いたのがきっかけです。現地では英語が通じず、断水や停電は日常茶飯事。辟易することも多かったけれど、困った時にはいつも誰かが助けてくれました。ルワンダの学生たちは、大虐殺の悲劇を二度と繰り返さないと固く決意し、必死に勉強していました。秘密保護法を巡る対立や中韓ヘイトスピーチなど、ルワンダと重なる問題が日本にもあると気づいたのは、帰国後のことです。日本の問題に目を向け、小さな声を伝える仕事をしたいと考え、NHKに入社。アフリカのドキュメンタリー1本を含む4本の番組を制作しました。これからも「伝えるべき」人の想いを、映像に乗せて伝えていきたいです。

アフリカに息づく豊かな暮らし

ご近所さん同士が毎日訪問し合うコミュニティー、人や時間に寛容でおおらかな暮らし、仕事より家族との時間を大事にする価値観——アフリカには、古き良き日本が失ってしまったものが今も生きています。

忘れられない村での思い出

ルワンダの小村でホームステイ。朝は日の出とともにヤギの散歩に行き、夜は薪の火で食事をしながら歌ったり踊ったり。そして空には満天の星が。水道や電気がなくとも、幸せを実感する日々でした。

かとう うらら
2015年東京外国語大学外国語学部 欧米第二・フランス語学科卒業。卒業後はNHKに入社し、現在は鹿児島放送局で番組制作を手掛ける。



The Power of Africa 3 [卒業生の声]

ブラジルからアフリカまで ポルトガル語が拓く未来

名井良三さん
東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター
学長アドバイザー
兼 社会・国際貢献情報センター副センター長


モザンビーク首都マプトの海岸地区の景色


アフリカ第2の規模のカランドゥーラの滝

東京外大ポルトガル・ブラジル語学科を卒業後、外務省に入省したのは1975年。当時、ポルトガル語を公用語とするアフリカ5カ国はやっと植民地から離脱する時期でした。アフリカ諸国の独立に伴い、2000年にモザンビークの日本大使館に赴任、その後アンゴラ大使を務めました。アンゴラは石油やダイヤモンドなどの資源に恵まれた「持てる国」。まさに「発展するアフリカ」でした。ところが、2014年から、中国の経済成長の鈍化とともに資源の価値が下落。資源依存から脱却できないアフリカ諸国は、再び苦境に立たされています。とはいえ、アフリカが「最後の成長大陸」であることに変わりはありません。今後、インフラ整備が進めば、アフリカ大陸は大きく発展していくでしょう。これからの時代、ポルトガル語専攻の卒業生にとって、活躍の舞台となるのはブラジルだけではありません。ぜひ、南米大陸とアフリカ大陸を股にかけて活躍してほしいと思います。

日本企業がインフラ整備に大活躍

アンゴラは資源国だけに、交渉にも強気で臨み、企業は非常に厳しい闘いを強いられていました。現在はNECが、アンゴラとブラジルを結ぶ光海底ケーブルの建設を進めており、日本企業の進出も盛んです。

植民地時代のアフリカに出合う

初めてアフリカを意識したのは学生時代。ポルトガル留学中、同じ下宿先にアフリカから来た学生がいて、「植民地から本国に来て活動している人もいるのだな」と思ったのが第一印象でした。

みょうい りょうぞう
1975年東京外国語大学卒業後、外務省に入省。モザンビーク大使館勤務等を経て、2011年アンゴラ特命全権大使。2015年10月より東京外大勤務。



アフリカは自分のルーツ 人々の自由な生き方に引かれます

小西亜宇基さん
国際社会学部 国際社会学科 アフリカ地域
地域社会研究コース3年

父の仕事の関係で、子どもの頃南アに住んでいました。アフリカは自分のルーツでありアイデンティ。将来アフリカで仕事がしたいと思い、東京外大に進学しました。今は大石ゼミで、カメルーンの狩猟採集民ピグミーの生活や文化を学んでいます。アフリカの人々がより豊かな生活ができるように開発や援助をしたい——以前はそう思っていましたが、大学で学ぶうちに考え方が変わりました。アフリカには独自の生活・文化があり豊かさがある、上から目線で「彼らを助けなくては」と考えるのは間違っている、と気づかされたのです。アフリカのことをもっと学び、いずれはまたアフリカに住みたい。あまり頑張らなくてものんびり生きられるのがアフリカの魅力。自分には、あの乾燥した気候と自由が肌に合っているんです。



こにし あうき
2013年東京外国語大学入学。幼稚園から小学校低学年まで南アフリカ共和国のケープタウンで過ごす。山口県立徳山高校出身。

The Power of Africa 4 [在学生の声]

「平和をつくる人」になりたい それが私の一番の夢です

内田 歩さん
国際社会学部 国際社会学科 アフリカ地域
国際関係コース3年

アフリカに興味を抱いたのは高校時代。映画や本で、ルワンダ虐殺のことを知ったのがきっかけです。たまたま紛争予防に携わる瀬谷ルミ子さんの講演を聞く機会があり、平和構築に関する仕事に関心を抱くようになりました。今は日下部ゼミで、国際協力や社会開発について学んでいます。入学後最初の半年で、アフリカに対する先入観が一気に覆されました。東京外大では、多様な視点から考える力が身に付きます。柔軟な姿勢で学べばとても成長できると思います。将来は国際協力機関やNGOで働きたいと思う反面、ソーシャルビジネスで持続可能な活動をしながら社会問題解決のために働きたいという思いもあります。将来は「平和をつくる人」になりたい。それが私の一番の夢です。



うちだ あゆむ
2015年東京外国語大学入学。2017年9月から1年間、ルワンダのプロテスタント人文・社会科学大学に留学。私立玉川聖学院高等部（東京都）出身。

社会的「女子力」の涵養

学長 立石博高
対談
ゲスト
坂東眞理子 氏
昭和女子大学理事長・総長　東京外国語大学経営協議会委員

東京外国語大学では、数多くの卒業生が世界に勇躍し、道なき道を切り拓いてきた。2014年度には文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援（タイプB：グローバル化牽引型）」に採択。世界で活躍する人材の育成をさらに推進させることとなった。少子化が進む中、特に期待されているのが、女性の人材育成だ。これからの時代、大学の人材育成や女性のキャリア形成とはどうあるべきか。ベストセラー『女性の品格』の著者でもある昭和女子大学理事長・総長の坂東眞理子氏に、本学と女性への期待を伺った。

文・吉田燿子／写真・竹井俊晴



ばんどう まりこ
1969年東京大学卒業後、総理府に入省。78年日本初「婦人白書」の執筆を担当。80年ハーバード大学へ留学。統計局消費統計課長、埼玉県副知事、在豪州ブリスベン総領事、内閣府男女共同参画局長等を経て2003年に退官。04年昭和女子大学女性文化研究所長、07年同大学長に就任。16年から現職。06年に上梓した著書『女性の品格』はベストセラーとなった。

たていし ひろたか
東京外国語大学長／1976年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業、78年東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了。92年から東京外国語大学に在職、2013年4月より現職。著書に『スペイン歴史散歩―多文化多言語社会の明日に向けて』（行路社）など。

今、日本に一番必要なのは グローバル人材

坂東眞理子氏（以下、坂東）　東京外国語大学は蕃書調所以来の長い歴史を持ち、総合大学とは次元の違う特色を持っていらっしゃる。これは大変な資産だと思います。世界諸地域の言語だけではなく、地域の社会や歴史についても研究の蓄積をお持ちですから、「グローバル化とは英語だけではない、東京外大は本当の意味でのグローバル人材を輩出できる大学だ」ということを、もっとアピールされるといいのではないでしょうか。

立石博高学長（以下、立石）　おっしゃる通りです。東京外大は、ビジネス人材や世界の地域で活躍する人材を数多く輩出してきました。しかし、本学のイメージは語学一辺倒でした。今後は、そうした本学の伝統を広く世間にアピールしていきたいと思っています。

坂東　特に力を入れていただきたいのが、女性の人材育成です。東京外大の卒業生には、ビックリするような辺境に行って活躍している女性が多いですよね。最近、たとえば商社などのグローバル企業の方から、「今の男の子は危ない所に行きたがらない」という話をよく聞きます。むしろ女性のほうが、チャレンジ精神旺盛な人が多いのではないでしょうか。

立石　そうですね。アフリカ地域の専攻ができて今年で6年目になりますが、1年間ザンビアに留学し、その経験を買われて商社に入社した元気な子もいます。

坂東　今、日本企業に一番不足しているのはグローバル人材だと思います。一昔前は、グローバル人材といえば「未開の地を開拓し、地域の資源を自分たちのために利用する」というイメージがあった。でも、これからは、現地の人たちと協力して地域に貢献できるような仕事をするのが本当のグローバル人材だと思います。

立石　本学の学生には、在学中に異文化理解や多文化共生の大切さを、体験を通じて学んでもらいたいと考えています。日本では海外留学をする学生が大変増えていますが、その多くは1カ月以内の短期留学だそうです。でも、それでは異文化理解力が身に付かないため、6カ月以上の留学経験者を求める企業が増えているそうです。

坂東　留学を経験すると、本当に一回り成長しますよね。昭和女子大学には留学やダブルディグリーの制度があります。国際学部の学生は最低半年間、親元を離れてボストンで生活することになります。

立石　本学は文部科学省の「スーパーグローバル大学」事業に採択されており、2年次に約1カ月、3・4年次に約1年の留学を目標にしています。昨年度の学部生の留学経験者は、6カ月未満が583人、6カ月以上は782人です。

坂東　学生数に占める割合としては、かなり多いですね。



坂東 眞理子

Mariko Bando

自分の資質を見極め 働き方を確立

立石　坂東先生の生い立ちやキャリアについてお話しいただけますか。

坂東　私は富山県で、女姉妹の4番目として生まれました。子どもの頃から元気で成績も良かったものですから、「男の子だったらよかったのに」と、耳にタコができるほど聞かされて育ちました。

立石　東大では何を専攻されましたか。

坂東　人間について勉強したいと思い、心理学を専攻しました。ちょうど大学紛争の頃で、勉強にふさわしい環境ではなかったのですが。

立石　私は1969年に東京外大に入学しました。大学紛争で東大の入試がなくなり、東京外大に進学したのです。ところで坂東先生は、東大卒業後、総理府に入省されましたよね。

坂東　総理府、現在の内閣府には34年いました。採用された時は「ラッキー」と思ったのですが、いざ入ってみると、女性は全く将来を期待されていない。女性が地方に赴任すると嫌がられる雰囲気があったそうです。20代の頃は「私は公務員に向いていないのかな。でも、今さら採用してくれるところもないから我慢しなきゃ」と思っていました。

ところが、20代後半で青少年白書を書き、33歳の時に初めて婦人白書を執筆。それが評価されて、ハーバード大学のフェローとして留学させてもらえることになりました。一皮むけたのは、それがきっかけですね。自分は男性のように、朝3時まで本省で国会待機し、また朝7時から働くというような働き方はできない。でも、企画書や白書を書く仕事は得意だから、これでやっていけるかもしれない、と思うようになったのです。

立石　自分の資質を見極め、伸ばしていくことは大切ですよね。

時には誰かに助けを求めることも必要です

優しさや賢さを失わない 自立した女性になってほしい

坂東　私はもがきながらもなんとか生き延びたのですが、大学の同級生の中には、仕事を辞めてしまった人も多いですね。

立石　チャンスを生かすだけの努力をされてきたわけですよね。2007年に昭和女子大の学長になられたのは、どんないきさつがあったのですか。

坂東　昭和女子大は、もともとは良妻賢母的な女性を育てるために創立された大学です。でも、時代の流れに合わせて大学も変わらなければというので、当時の昭和女子大の理事長や理事の方々からお声掛けいただいたのです。

立石　ベストセラーになった『女性の品格』を出版されたのも、その頃ですね。

坂東　ちょうど昭和女子大の学長になる話が決まった頃で、「どんな女性を育てたらいいのか」考えをまとめました。社会で自立しながらも、優しさや賢さを失わない女性になってほしい、男性とは違う新しい働き方が必要だということが言いたくて、あの本を書いたのです。

立石　坂東先生は子育てをしながら仕事をされたわけですよね。ワーク・ライフ・バランスという点ではいかがでしたか。

坂東　私の場合は、子育てにかける時間が少なすぎました。上の子は保育所と近所の方たちにお願いして、二重保育で育てたのですが、仕事が忙しくて、子育ては毎日綱渡りのようでした。

そうこうするうち、父が早世して母が1人になったので、子どもたちの面倒を見てもらうようになりました。1人でする子育てと、誰かが愛情を持ってサポートしてくれる子育てとは、こんなにも違うものかと思いましたね。

立石　最近、ある女性が書いた本が評判になっています。33歳から50歳までの17年間、子育てに全力投球し、子どもが大学に進学したのを機に再就職。今は専業主婦時代の経験や英語力を生かしてホテルで管理職を務めているそうです。

坂東　終身雇用・年功序列の日本的企業では、よほどの能力がない限り、子育てを終えた後で社会復帰し、企業社会でチャンスをつかむのは難しいでしょうね。

立石　女子学生がキャリアデザインのために、大学在学中にやっておくとよいことはなんでしょうか。



立石 博高

Hirotaka Tateishi

自分の資質を見極め、伸ばしていくことが大切

坂東　女子学生も語学の他に、自分の強みとなる武器を持つといいと思います。ファイナンスやICTなど、何か別のスキルを身に付けて、他人とは一味違った自分をデザインすることが必要です。

立石　最近、坂東先生が出版された『女性リーダー4・0新時代のキャリア術』の中で、「リーダーとなる女性には組織管理力が必要だ」と書かれていますね。

坂東　女性のリーダーは男性以上に、与えられた仕事を全部自分でこなさなければ、と思い込む人が多いんですね。でも、チームとして仕事をするからには、他の人が力を発揮できるようにするのがリーダーの条件です。自分で全部やろうと仕事を抱え込むより、メンバーに権限移譲し任せることも大事です。

立石　手抜きは大事ですね。

坂東　私は最近、助けを求める力「求援力」が大切だと言っています。時には他人に助けを求めることも、これからの女性には必要だと思います。

立石　そして仕事だけでなく余暇も楽しみ、人生を充実させるということですね。

坂東　東京外大には、世界で活躍するパワフルな卒業生が、男女を問わず大勢いらっしゃる。ぜひ学生を励まして、広い世界へと送り出していただきたいですね。

立石　学生たちには、伸び伸びと活躍してもらいたいと思います。今日はありがとうございました。












Alumni in the Spotlight_02

日本にいては知り得ないことを学んだ

田口哲雄

FCケルン 育成部門ゴールキーパーコーチ

「サッカーの醍醐味である得点を防いで、観客の期待を裏切る。ゴールキーパー（GK）の魅力はそんな天邪鬼（あまのじゃく）なところにあります」

最近はドイツで活躍する日本のサッカー選手も珍しくないが、プロ選手の経験なくGKコーチとして活躍する田口哲雄さんは、異色の存在だ。教え子には、ドイツ代表としてリオデジャネイロ・オリンピックに出場したティモ・ホルン選手もいる。

サッカーの盛んな埼玉県浦和市に生まれ、小学校1年生でサッカーを始めた。高校時代にJリーグがスタートし、ドイツがFIFAワールドカップで優勝。サッカーを通じて海外の地理や歴史に興味を持つようになり、東京外大のドイツ語学科に入学。大学時代も社会人チームでプレーしていたが、膝の故障で選手の道は断念せざるを得なくなった。

3年生の秋になっても就職活動に踏み切れずにいた田口さんは、約3週間ドイツ、オーストリア、イタリアを旅する。本場のサッカーを目にして「なぜドイツには優秀なGKが育つのか」を追究したくなり、卒業後に渡独した。

「何が起こるかわからないからこそ面白い。一度きりの人生だから、大好きなサッカーを生業（なりわい）にしようと決心しました」

ケルン体育大学で学びながら、アルバイトでサッカースクールのコーチをしたが、ドイツ語に苦戦。思うことが伝えられず歯がゆい思いをした。

人との出会いに恵まれたことと、育成組織の拡充の流れもあって、2006年FCケルンに正規雇用で採用される。ドイツで学んだGK指導の秘訣の一つは、ひざの角度やタイミングなど小さな違和感に気付く目を持つことだという。また、日頃から常に「サッカーが好き」という初心に立ち返るようにしている。

「若者はそういう純粋な気持ちで取り組んでいますから」

いずれは、ドイツで習得したノウハウを日本のサッカー界に持ち帰りたいと考えている田口さん。今日もトレードマークの笑顔でグラウンドに立つ。V



ドイツへ来た当初は、日曜や祝日はほとんどの商業施設が休業するため、やることがなく不安だったが、今ではそういった時間をのんびりと過ごすことが上手になった。

たぐち てつお
2001年東京外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業、ドイツのケルン体育大学で学ぶ。2006年にFCケルンの育成部門GKコーチに。現在はU21チームのコーチングスタッフおよびU15～U21のGK育成を担当している。



Alumni in the Spotlight_01

遠回りしたからこそ、見えた景色がある

相嘉優公子

ブルータグ 事業開発ディレクター 兼 広報担当

「プロの仕事のワクワク感を、専門の道具と用語を使って子どもにそのまま感じてもらいたい」

相嘉優公子さんは、子ども向け職業・社会体験施設「キッザニア」に準備段階から約10年間携わった。職業体験プログラムを作成するに当たり、仕事の裏側まで見学し、プロのこだわりを追究した。形にしていく面白さにとりつかれ、自身担当の企画や工程管理にとどまらず、スタッフ用の台本や制服の制作から営業まで、あらゆる作業をこなした。

バイタリティーあふれる相嘉さんだが、卒業後10年ほどは大学での学びを仕事に結び付けられないことにもがいていたという。

「語学は目的ではなく、目的をサポートしてくれるもの。ようやくそれに気付くことができました」

東京外大ではスペイン語を専攻。旅費を貯め、1年生の終わりに友人と1カ月間スペインを周遊。すっかり気に入り、在学中にホームステイや1年間の留学も経験した。

卒業直後はスペインとの関わりを求めすぎて、自分に合うと思える仕事が見つけられなかった。2002年にFIFAワールドカップ組織委員会へ参加。語学はスキルよりも伝達力が大事だと痛感し、世の中には外から見えない仕事があることも知った。

メキシコのテーマパーク「キッザニア」の企画職に応募したのは、スペイン語との接点もあったが、「一から作り上げる」仕事に引かれたからだ。打ち込めるものが見つかり、スペインへのこだわりは自然と消えていった。

「寄り道は必要な道。遠回りしたからこそ見えた景色、わかったことがたくさんあります」

1年ほど前に、スポーツに関するさまざまな事業を展開するブルータグに入社。現在はスポーツ大会の主催者とボランティアをつなぐ新事業を担当している。

「東京外大の自由な雰囲気のおかげで、人はみな違い、生き方に正解はないと思えるようになった」という相嘉さん。その柔軟性を生かして「スポーツを軸に地方の活性化と市民の健康増進を図れたら」と、新たな挑戦に目を輝かせる。V



子ども向けにかわいらしくしたいと希望するスポンサーもいたが、実際に街で見かけた時に「あ、ここでお仕事したよ！」と、キッザニアで体験したことを思い出してもらえるよう、あえて実店舗そのままを2/3サイズの子ども目線で再現した。
（写真提供：キッザニア東京）

あいか ゆきこ
1999年東京外国語大学スペイン語学科卒業。同年多言語DTPサービス会社に就職。その後、契約スタッフとして2002FIFAワールドカップで放送関係の業務に従事。KCJ GROUPなどを経て、2016年から現職。

きく

大学院総合国際学研究院／国際社会部門 講師
小田原 琳
Rin Odawara

森に響く 鳴き声に思う 声高の意味

研究室からは大学の中庭を見下ろせる。淡い桜色、柔らかい新緑、冬の枯木立。築山で遊ぶ、近所の保育園の子どもたち。パソコンを睨みつづけて疲れた目に優しい風景が、いつも眼下に広がっている。

あるときいつものように仕事をしていると、ひときわ高い鳥の声が聞こえてきた。小鳥にしては大きな鳴き声だと思い目をやると、夏の濃い緑の森に、数羽の黄緑色の鳥が舞っている。びっくりして検索したところ、「ワカケホンセイインコ」という、本来はインド南部やスリランカに生息しているが、ペットとして輸入され60年代に野生化した鳥らしい。体長約40㎝。遠目にも大きく鮮やかで、それからは声を聴いて姿を探すのが楽しみになった。

近ごろ、「声高」ということばの使われ方が気になっている。「声を高くはりあげるさま」という意味だが、そうして何かを訴えること自体が、憚られるようになっている気配。たとえば「人権の保護だけ声高に主張しているように見えて残念」という国会議員の発言（朝日新聞2017年5月13日）や、「声高に反原発を訴える芝居ではない」（同6月16日）など。「自国第一主義」を声高に説く欧州のポピュリズム」（同6月20日）のように、どんな主張であれ「声高」に訴えることは、それが中傷や差別につながらないかぎり、許されるだろう。人権の保護にしろ反原発にしろ、堂々と主張してよいことだ。だがある種のことがらは、必死に声をはりあげると「そんな風に声高に訴えては耳を傾けてもらえない」とあたかも忠告するような体で、その実は鬱陶しがって、沈黙させられ、なかったことにされてしまう。

あの華やかな、けたたましくさえあるさえずりがなければ、私は目の前のワカケホンセイインコに気づかなかったろう。声を聴くためには、存在に気づかなければならない。存在に気づかれるために、私たちは声高に訴えるのである。それを抑圧することは、存在を抑圧することだ。▼

おだわら りん
2006年東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程満期退学。学術博士。専門はイタリア近現代史、ジェンダー・スタディーズ、ボーダーランド・スタディーズ。『〈境界〉を創りだす力――南イタリアから立てる近代への問い』（東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために――現在をどう生きるか』岩波書店所収）共訳書としてフェデリーチ『キャリバンと魔女』以文社。

アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授
品川大輔
Daisuke Shinagawa

時を知らせる メロディーを 聴く

アフリカの言語は、ことばのメロディーがメッセージの伝達に大きな役割を果たすものが多く、私が調査しているチャガ諸語（キリマンジャロ山の周辺で話される）もその例に漏れない。ことばのメロディーというのは、日本語のアクセントのようなものを想像してもらえればよいのだが、ふたつの点で違いがある。

ひとつめは、メロディーが決まるしくみの違いである。例えば東京方言では、「箸」は最初の音節が、「橋」は後ろの音節が高くなるというふうに、「単語のどこかが高くなる」という形でメロディーが決められる。したがって、ひとつの単語の声の高さを曲線で描こうとすると、盛り上がっている部分がひとつだけの波として描くことができる。それに対してチャガ諸語の場合は、「各音節ごとに高さが決まる」タイプの言語（声調言語と呼ばれる）なので、ひとつの単語の中にいくつもの凸凹が生じうる。それだけでなく、場合によっては高い部分が連続すると一方がさらに高くなったり、あるいは逆にちょこっとだけ下がったりと、波の高さもまちまちになって、かなり複雑なメロディーになる。

もうひとつは、メロディーのはたらきの違いである。日本語の場合、ふつうメロディーの違いが表すのは単語の意味の違いである。日本語だけではなくアジアの声調言語は一般的にこのタイプであるが、アフリカの言語の場合、メロディーの違いが文法的な概念を表すことがある。この顕著な例が、私が最初に調査をしたチャガ諸語のルワ語に見られる。それは、メロディーが時制の違いを表すという現象である。例えば、「～するだろう」という未来時制と「いつも～している」という習慣の形、また同じ過去でも「いつの過去か」という過去時制の区分もメロディーの違いだけで表される。メロディーが時を運ぶ言語、と言ったら気障だが、最初の調査でこれに出くわしたときは途方に暮れてしまったことを思い出す。あの複雑なメロディーを必死に聴き取っていた頃から、もうすぐ20年の時が流れようとしている。▼

しながわ だいすけ
名古屋大学大学院文学研究科修了（博士）。日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター駐在員、名古屋大学博士研究員、香川大学経済学部准教授等を経て、現在東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授。専門はバントゥ諸語を対象とした記述言語学。著書は『チャガ＝ロンボ語（Bantu E623）文法スケッチ』（AA研言語研修テキスト）など。

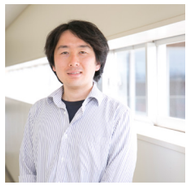
GLOBE Voice Column KIKU

イラスト・ミヤギ ユカリ

Information






























東京外大のメンバーに
なった方々から
コメントをいただきました



2016年12月1日より着任

世界言語社会教育センター
特任助教 教育社会学、比較教育学

布川あゆみ

FUKAWA Ayumi

学部時代のドイツ留学をきっかけに、社会問題化する「移民の受け入れと統合」に関心を持ち、ドイツの移民問題を研究しています。本学では主に「大学教育再生加速プログラム(AP)」を担当。学生の皆さんの多様な学びとその成果を、社会に対してより分かりやすく、説得力を持って提示できるよう、検討を重ねています。皆さんのリアルな声をたくさん聞かせてください！



世界言語社会教育センター
特任助教 日本語教育

河内彩香

KAWACHI Ayaka

文学を勉強するつもりで入った大学で日本語学に出合い、会社員を経て日本語教師になりました。どのような仕事が自分に向いているかは、やってみないと分からないので、皆さんにはいろいろな経験を積んでほしいです。専門は談話分析で、自然な会話を収集・分析し、日本語教育に生かすための研究をしています。運用力を高める授業を追求し、日本語教育の面白さを伝えていきたいと思います。



2016年10月1日より着任

大学院国際日本学研究院
准教授
日本語教育・社会言語学・音声学

阿部 新

ABE Shin

専門は日本語教育・社会言語学・音声学です。学生時代は小笠原諸島の日本語の方言を研究していましたが、大学院修了直後、スペインで2年間日本語を教え、日本語教育も専門となりました。今回、10年以上ぶりに母校に戻りました。外大は、やりたいことを、やりたいように、やりたいだけ、できる場所です。今後は、研究の面白さを伝えつつ、皆さんの「やりたい」をサポートしていきたいと思います。



2017年2月13日より着任

世界言語社会教育センター
特任助教 日本近代文学

ラージ・ラキ・セン

SEN Raj Lakhi

専門は日本近代文学です。明治時期において国家や法制度がもたらした変化を当時の作家や知識人層の文学作品を通して研究しています。明治時期の文学や法を考えることは決して現代と関係のない「断絶的」なものとはいえません。現行法でも明治民法の影響があり、近現代文学作品や漫画、演劇などにその影響が顕然で、社会の変動や個人の「レジスタンス」が読み取れるのではないかと思います。



世界言語社会教育センター
特任講師 宗教学

丸山空大

MARUYAMA Takao

近代人や近代社会にとっての宗教の意味や役割に興味を持ち、宗教学を研究しています。とりわけ、近現代のユダヤ人思想家やドイツ・ユダヤ人社会を専門としています。

宗教は今なお生きています。世界各地のさまざまな宗教文化は言うに及ばず、私たちの身近なところにも意外な形で宗教は存在しています。恐れず、無視せず、侮らず、宗教に大いに関心を持ってほしいです！



2017年2月1日より着任

世界言語社会教育センター
特任講師
東アジアの近現代比較文学

逆井聡人

SAKASAI Akito

私の研究を限定的に示せば「アメリカ占領期の日本における都市文化」ということになりますが、その根幹には自己完結的に語られてきた日本をアジア太平洋に直結した文化空間として捉え直す、という問題意識があります。ですから授業では学生の皆さんと言葉を交わし、重ねることで一緒に国家やジェンダーなどのさまざまな認識の殻を破って、広い視野を獲得していきたいと思います。

2017年4月1日より着任



世界言語社会教育センター
特任講師 中国語

飯島啓子

IIJIMA Keiko



世界言語社会教育センター
特任講師 マレーシア語

アズヌール・アイシャ・ビンティ・アブドゥッラー

AZNUR AISYAH BINTI ABDULLAH



世界言語社会教育センター
特任講師 ポーランド語

プルスコタ, カロリナ

PLUSKOTA, Karolina



世界言語社会教育センター
特任准教授 イタリア語

フィオレッティ, アンドレア

FIORETTI, Andrea



世界言語社会教育センター
特任講師 フィリピン語

パルマ・ヒル, フロリンダ・アンパロ・アダラヤン

PALMA GIL, Florinda Amparo Adarayan



世界言語社会教育センター
特任准教授 ラオス語

タムマウォン, スリカン

THAMMAVONG, Soulikanh



世界言語社会教育センター
特任講師 英語

ライチェック, マシュー

RYCZEK, Matthew



世界言語社会教育センター
特任准教授 ヒンディー語

ミッシュル, リチャー

MISRA, Richa

2017年4月1日より着任



世界言語社会教育センター
特任講師 芸術文化

小久保真理江

KOKUBO Marie

私の専門は芸術文化で、特に近現代イタリアの芸術文化を中心とした研究を行っています。地域・領域横断的テーマに強い関心を持っており、イタリアにおけるアメリカ文化の影響などについても研究してきました。芸術文化の授業のほか、イタリア語の授業も担当しています。芸術文化やイタリア語の面白さを伝えていきながら、教員・研究者としてさらに成長していきたいと思っています。



現代アフリカ地域研究センター
教授／センター長
アフリカ研究（中部アフリカ）、国際関係論

武内進一

TAKEUCHI Shinichi

1986年に本学を卒業してすぐアジア経済研究所に入り、中部アフリカ仏語圏諸国を中心にアフリカ研究に従事してきました。30年以上同じ地域を見てきましたが、アフリカを知ることは、自分を知ることだという思いを強くしています。アフリカで暮らす人々からたくさんのことを教わり、行くたびに救われた気分になります。アフリカの素晴らしさを多くの人に伝えたいと思っています。



世界言語社会教育センター
特任講師 開発経済学、国際経済学、
ラテンアメリカ研究

内山直子

UCHIYAMA Naoko

開発経済学を軸に、ラテンアメリカの貧困・格差・脆弱性に関するデータを用いた実証分析を専門としてきました。講義・演習等ではラ米地域に限らずアジア・アフリカ・旧社会主義国など幅広く経済開発問題を議論していきたいと思います。私自身も本学の卒業生ですので、皆さんと一緒に外大生の理想像「語学×専門性」を（決して平坦な道ではありませんが）極めていけたらうれしく思います。



世界言語社会教育センター
特任講師 中央アジア史

木村 暁

KIMURA Satoru

歴史学の立場から中央アジアにおける政治権力と宗教の関係について研究しています。動態と変容に満ちた中央アジアという歴史空間に花開いた独自の文明は、民族・文化的な異種混交に彩られてきました。授業ではこの地域に備わる多様性や奥深さ、現代を歴史的視座から理解することの大切さ、また、独特の異種混交性を内包するウズベク語の面白みなどを伝えていければと思っています。

2017年4月1日より着任



大学院国際日本学研究院
講師 日本語教育、応用言語学

伊東克洋

ITO Katsuhiro

教育とは学び手が創造的、自律的に学習を進めていくために必要かつ十分なサポートを提供することだと考えています。教師は一人一人の多様性を受け入れ、対話と協働を通して、学び手が最大限の力を発揮できるような環境づくりに努めなければなりません。また、教育へ還元できるような研究を進めていく必要もあります。皆さんと一緒に切磋琢磨し、日々精進していきたいと思っています。



世界言語社会教育センター
ELC特定教員 英語教育、
Second Language Acquisition

金子麻子

KANEKO Asako

SNSにはたくさんの「友達」がいても、ふと「リアルな会話」が恋しくなりませんか？「なんだか、誰かと話しがしたいなぁ」と思ったら、ぜひ研究講義棟304室のELCに来てください。ELCでは、英語アドバイザーを含む6人までの小グループで、英語で会話するスピーキング・セッションを提供しています。4階English Loungeには留学生もいます。リアルな会話の楽しさを再認識できる40分になりますよ。

2017年3月31日より着任

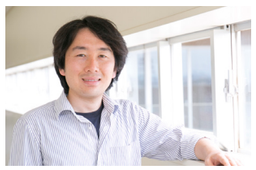


世界言語社会教育センター
特任講師 社会言語学

ボルロンガン・アリアン・マカリンガ

BORLONGAN Ariane Macalinga

私は社会言語学の講師です。主な研究テーマは世界中の英語、特に、フィリピン英語、日本英語、アジア英語でその文法がどのように変化してきたのかを研究しています。休日は、ミュージカルを観たり、美術館で絵画鑑賞を楽しんでいます。好きな芸術家は草間彌生です。ポテンシャルがあふれている東京外大生と共に研究できることがとてもうれしく、言語学にとって有意義な研究ができると信じています。



アジア・アフリカ言語文化研究所
助教 南アジア史

小倉智史

OGURA Satoshi

歴史学が専門で、前近代の南アジア、特にカシミール地方の歴史を研究してきました。カシミール地方は中央アジアと南アジアのフロンティアとして古くから人々が往来し、複数の言語（サンスクリット／ペルシア語）、宗教（仏教／ヒンドゥー教／イスラーム）が混在する、複雑な社会を形づくってきました。このような地方の歴史研究には苦労も多いですが、新たな発見をした時の喜びも人一倍大きなものです。

Information

2017年3月、
退職された先生たち
からの「手紙」

世界言語社会教育センター
教授
東 憲一
HIGASHI Kenichi



1978(昭和53)年に助手(助教)として奉職し、定年退職までに至りました。体育実技は当初の2年間必修から現在の1/4年必修へと変わり、データを見るまでもなく東京外大生の体力は低下しています。少ない実技の授業時間ですが、受験で疲弊した心身回復のきっかけとし、人間関係を育み、勉学や生涯スポーツへと繋いで下さい。研究課題としては主に講道館柔道の創始者である嘉納治五郎を取り上げ、嘉納を巡る日本の学校教育、清國の教育事情視察(留学生、京師大学堂)、語学教育、教養教育等の視点から分析しました。

◉お薦めの1冊
『五輪書』
宮本武蔵(伝)
「平易な解説書がさまざま出ています。武道伝書入門のご参考まで」

大学院
国際日本学研究院
教授
野本京子
NOMOTO Kyoko



今でも時折、西ヶ原4丁目に向かう都電から沿線に咲くバラの花を見た時の心象が蘇ります。29年前の春です。非常勤で教えたことはありましたが、初めての専任で留学生に教えるのも初めて。90分何コマかの授業ができるのだろうかという不安を抱え、季節のやさしい花々に励まされて旧キャンパスに通いました。その後、多くの学生たち、そして先生方と出会い、年月を重ねてまいりました。職員の方にも本当にお世話になりました。今後は、途中で止まっていた私の中での課題に少しずつ迫っていきたいと思っています。

◉お薦めの1冊
『評伝 石牟礼道子 渚に立つひと』
新潮社　米本浩二(著)
「退職後に読んだ本の一冊です。学生時代に読んで衝撃を受けた『苦海浄土 わが水俣病』(講談社)をもう一度、読んでみようと思いました」

大学院
総合国際学研究院
教授
井尻秀憲
IJIRI Hidenori



20年間の東京外大での勤務はようやく終焉を迎えました。優れた学生、教員、事務スタッフに恵まれ、当初は国際関係論の授業の冒頭で、「国際関係論とは何か」から始めていましたが、最近は「国際教養とは何か」から始めるようになっていました。「国際教養」は専門領域の基礎を土台にして、それを柔軟な思考で幅広くまとめるもので、単なるスキルではありません。福澤の言う「実学」と同義なのです。このことを、最後のご挨拶にかえたいと思います。

◉お薦めの1冊
『丸山眞男回顧談(上・下)』
岩波現代文庫
植手通有他(編)
「丸山眞男の著作は、その思惟方式の一貫性を問うものとして優れてはいるが、意外に寡作であり、むしろこのような本のほうが興味深い内容を含んでいるので、薦めたい」

大学院
総合国際学研究院
教授
新井政美
ARAI Masami



トルコ語専攻で22年を過ごしました。東京外大は、どこか1つの国や地域について深く学ぶので、日本や日本語を客観視しやすいという利点を持っています。さらにもう1本、学んでいる言葉や地域も客体化するための補助線が引かれるとよいのですが、そのための多様な選択肢も、ここでは用意されているのが素晴らしいところだと思います。

東京外大のさらなる発展を陰ながら祈っています。あ、それから僕は達者です。皆さんもどうぞお元気で。

◉お薦めの1冊
『頼山陽とその時代』
ちくま学芸文庫
中村真一郎(著)
「退職してすぐ、何十年ぶりかで再読し、やっぱりうーんと唸りました。すごいなあ」

大学院
総合国際学研究院
教授
和田忠彦
WADA Tadahiko



写真・森清氏

東京外大での18年間をふり返って最大の収穫はと問われれば、「学生諸君との出遭い」と迷うことなく答えることができる。それゆえ、大学教員が一箇所に長く留まる傾向にあることを好ましくないと考えている身としては、当初の予想をはるかに超える長逗留になった。単眼思考による視野狭窄に陥ることなく、わが身に関わる出来事をみつめ次なる行動へと踏みだすため、暫し立ち止まり精確に距離を測定する——そんな姿勢をわが身に課す意味も込めて、新著は『遠まわりして聴く』(書肆山田、2017年7月)と題した。

◉お薦めの1冊
『辻征夫詩集』 岩波文庫
辻征夫(著)、谷川俊太郎(編集)
「日常を生きることが詩につながる——そんな40年近い詩人の軌跡を一冊でたどることができる。編者谷川俊太郎と作者の対談も収載」

アジア・アフリカ
言語文化研究所
教授
町田和彦
MACHIDA Kazuhiko



学部・大学院の学生として9年、外国語学部(当時)の教師として14年、アジア・アフリカ言語文化研究所の所員として22年、東京外大には文字通り半世紀近くお世話になりました。ヒンディー語という言葉を研究対象にしながらも、今から思えば、寄り道や遠回りの多い楽しい道のりでした。私の道草がはなはだしく、恩師から小言をいただいたのも懐かしい思い出です。定年退職した現在、今度こそヒンディー語に集中しなければなどと殊勝な気持ちになっています。

◉お薦めの1冊
『マハーバーラタ』
ちくま学芸文庫
上村勝彦(訳)
「古代インドの叙事詩にして、世界最長の作品。この原典訳も、不幸なジンクスの例に漏れず訳業中途で訳者急逝のため8巻で未完」

アジア・アフリカ
言語文化研究所
教授
中見立夫
NAKAMI Tatsuo



研究テーマは近代モンゴルの国際関係を、中・ソ、モンゴル等関係諸国の文書館に所蔵される史料にもとづき明らかにすることでしたが、このようなマルチ・アーカイヴァルな研究手法は80年代までは全く実施不可能でした。でも国際環境の劇的な変化により、実際に文書史料を研究した世界初めての研究者となる幸運をえました。しかし調査許可を得るまでの交渉は困難を極め、焦燥する私に、「貴方は若いので将来をみすえ着実に勉強を進めるように」との助言をくれた各地の学者の配慮は生涯忘れえない宝物です。

◉お薦めの1冊
『国際政治史』
岩波書店、岩波全書
岡義武(著)
「国際関係の動態を極めて精緻に構造的に描いている」

副学長、附属図書館長／
大学院国際日本学研究院
教授
小林幸江
KOBAYASHI Yukie



思えば、私は人生の大半を東京外大で過ごしてきました。母校で学び、日本語教育一筋に勤めてこられたことを幸せに思います。そのきっかけは、金田一春彦著の『日本語』にあります。そこに見られる「外国語としての日本語」の視点は、当時の私には新鮮で衝撃的なものでした。そこから私の日本語教育は始まりました。

時が移り、日本礼賛の風潮が高まる現在、母語の日本語を、世界の諸言語の一つとして客観的に捉えようとするこの視点、姿勢は、私たちに求められているものであると考えます。退職後は、違った形でそれを伝えていきたいと思います。

◉お薦めの1冊
『The World is Flat』
PENGUIN BOOKS
Thomas L. Friedman (著)
「グローバリゼーション理解のために役に立ちます」